

『古今和歌集』 在原業平における漢詩文の受容

—「名にし負はば」歌にみる「倚傍」—

久保 瑞代

はじめに

武蔵国と下総国との中にある隅田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおほえければ、しばし川のほとりに下り居て、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかなと思ひわびて、ながめをるに、渡守、「はや舟に乘れ、日暮れぬ」と言ひければ、舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の、^{はし}嘴と脚と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず、渡守に、「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きてよめる名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

(古今集・卷七 羈旅・四一)

在原業平の和歌は『古今和歌集』に三十首収録されている。右の和歌の詞書は集中で最も長く、他の歌の長い詞書と較べてもあまりにも詳しい状況説明は、詞書の文章として異質である。また、『伊勢物語』第九段の本文と『古今集』の詞書との類似性が高いことから、『古今集』編纂のために献上された家集『業平集』と、原『伊勢物語』、現在残っている『伊勢物語』の三つの関係が問題にされ、

『伊勢物語』成立論ともからんでさまざまに論じられてきた。

さらに、和歌のできばえのみごとさもあって、『伊勢物語』の主人公と実在の在原業平とを混同し、作者の在原業平が実際に隅田川のほとりまで行った実体験に基づく作なのか否か、いわゆる「東下り」は事実か虚構かなどについても、現在に至るまで議論が尽きない。平安時代中頃には実話と考えられたが、鎌倉時代以降はそれが否定され、宗祇の注釈書などには「あづまのかた」は「東山の関白」(良房)の隠喻などと説明されたりもした。江戸時代になると契沖が『勢語臆断』で正史『三代実録』の記述を根拠に事実とする見方を示し、曲折を経て現在では虚構説がやや有力である。^(注)

本稿は『古今集』業平歌を『伊勢物語』第九段と比較し成立関係を考えること、あるいは「東下り」が事実か虚構かを検討することが目的ではない。当該歌について一首の構造や特徴、とりわけ漢詩文をどのように受容して構想されているかを考察しようとするものである。

一 知巧性と叙情性の融合

『古今集』の「名にし負はば」の歌については、目崎徳衛氏の優れた解説がある。一つ前の「からごろも」の歌を、「業平の作中最

も遊びの要素をたっぷりと含んだもの」で、旅の「徒然を慰めるために難題を所望され」、「奮発してあらゆる修辞の大サーピスを試みた」が、「慣れにし妻を都に残して来た故に、はるげくも来つる旅路のはての悲しみがいとど身にしむ」、「愉楽と悲傷が…不思議に混淆し」た歌であると称えた後に、次のように述べる。^(注2)

「名にし負はば」の歌は、「都鳥」の名に触発されて成った作である。実体と遊離した名称そのものに興を催すのは、一種のウイットである。しかも「いざ言問はむ」という鳴への呼掛けは、「借問す、薪を採る者よ、此の人、みな焉くに如ける」(陶淵明)とか「借問す、今何くにか在る、一たび去つて亦た還らず」(杜甫)といった、漢詩に類出する「借問」の語に做った、気取った表現形式であろう。こうして見ると、「名にし負はばいざ言問はむ」という上の句には気取りと遊びがあった。しかしこの場合も「わが思ふ人はありやなしやと」の下の句に至って、一転して嫺々たる調べが衆人を切なる郷愁へ誘い込む。ここにも諧謔と旅愁の微妙な複合がある。二首を比べて「名にし負はば」に郷愁が一段強く感じられるのは、日数重ねて都を遠ざかった距離に比例するのであろうか。

「都鳥」という名に触発されて言葉の遊びを楽しみ、上の句で「借問す、…」と漢詩に做って気取った口調で「都鳥」に問いかけ、下の句では一転して「嫺々たる郷愁」を歌いあげたとして、目崎氏は一首における機知との抒情の融合を高く評価する。

「名」に触発された歌はすでに『万葉集』にも見える。

これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ

背の山(名二負勢能山)

(卷一・雑歌・三五・阿閉皇女)

古ゆ人の言ひ来る老人のをといふ水そ名に負ふ滝の瀬(名尔)

負滝の瀬

(卷六・雑歌・一〇三四・大伴東人)

磯城島の大和の国に明らけき名に負ふ伴の緒(名尔於布等毛能)

乎)心努めよ

(卷二〇・四四六六・大伴家持)

「背の山」を称賛しつつ山名に触発されて前年に薨じた「背」(夫)を偲ぶ三五番歌、美濃国の多芸への行幸に供奉し、古来有名な養老の滝を見て讚美する一〇三四番歌、天孫降臨の時から天皇に扈從した名門だと一族を鼓舞する「族を諭す歌」の反歌である。これら「万葉集」の「名に負ふ」は「名に負ふ+体言」の形で「世に名高い」であることよ」と詠嘆する表現であった。

それに対して、業平歌の場合は「名に(し)負ふ都鳥」と単純に詠嘆して終わるのではなく、条件節「名にしおはば」(名として負い持つならば)として初句に置き、第二句以下の意外な展開を可能にした。「名にし負はば」と初句が発せられると、次に何が出てくるのか、その内容に聞き手は興味を持つ。「いざ言問はむ」と呼びかけがなされ、呼びかけの対象が「都鳥」だと明らかになると、次はいったい鳥に何を問うのかと、さらなる興味がかき立てられる。「名にし負はば」は次に提示されることへの期待や関心を高める巧妙な詠歌の始発点となる表現であった。

名と実の乖離を前置きとして本題に入る表現形式は白居易詩に見える。

促織不成章 促織は章を成さず

提壺但聞聲 提壺は但だ聲を聞くのみ

嗟哉蟲與鳥

嗟哉ああ 蟲と鳥と

無實有虛名

實無くして虚名有るのみ

……

……

〔寓意詩五首 其三〕『白氏文集』卷二・九二

「促織」（コオロギ）は「織を促す」（綾の反物を織る）ことなく、「酒壺を提げる」という名の鳥もいたずらに囀るのみで、虫も鳥も虚名があるだけで実を伴わない。それを前置きとし、かつて実の兄弟のようにと川の神にまで誓いを立てた友との間柄が、榮達と困窮とに道が別れ、有名無実になってしまったと嘆く。官僚として宮廷社会で生きることの難しさというのが本意である。

業平歌の場合は詞書に「京には見えぬ鳥なれば」とあるので、都鳥が「實無くして虚名有る」ものと承知のうえ、「名」に惹かれて呼びかける。「わが思ふ人はありやなしやと」との問いかけに応答のあるはずがなく、問いはそのまま長く余韻となって響き続ける。

二 詩語「借問」のニュアンス

この歌には「名にし負はばいざ言問はむ」と「都鳥」に呼びかける上の二句と、「いざ言問はむありやなしやと」と尋ねて本題を提示する第二句と第五句という二つの呼応関係が含まれる。その結節点に位置するのが「いざ言問はむ」である。「名にし負はばいざ言問はむ」と呼びかける表現は、目崎氏の述べたとおりウィットに満ちた表現であるが、「いざ言問はむわが思ふ人はありやなしやと」という呼応関係に移ると、一転して「わが思ふ人」の安否を問う「切なる郷愁」がクローズアップされる。

すなわち、「いざ言問はむ」は、第三句との関係で見ると、もの言わぬ鳥をからかう諧謔のニュアンスであるが、第四・五句との関係で見ると、確かめる術のない「わが思ふ人」の安否を問おうとする哀切な情感をたたえた言葉として機能する。

そのような二義性を持つ「いざ言問はむ」を、目崎氏は陶潜などの漢詩に類出する「借問」の語に倣った気取った表現形式であろうとされた。「借問」のニュアンスはいかなるものかを六朝の陶潜と曹植の詩によってまず確認したい。

『陶淵明』（新釈漢文大系 詩人編Ⅰ）には百二十四首の詩賦を収める。うち四首に「借問」という表現が見える。四首とも最初に前置きがあり、中ほどに「借問す」という問いかけを置く。（詩句の構造がわかりやすいように、「借問」に二重傍線、問いかける対象に破線、問いかける内容に波線、疑問詞に太い波線を施した）。

……

……

借問借問採薪者

借問す 薪を採る者

此人此人皆皆焉焉如

此の人 皆皆焉焉ににか如かくと

薪者薪者向我言

薪者 我に向かひて言ふ

死没無復餘

死没して復た餘す無しと

……

……

〔歸田園居五首〕其四

山沢を逍遙した時、かつて人の住んでいた跡を見つけた。薪採りに「ここにいた人は皆どこに行ったと尋ねると、亡くなってしまっただれも残っていない」と答えた。人生は夢幻のようで最後は無に帰すのだと感慨を述べ詩は終わる。展開部に仮構の問い「借問」を置き「薪者」を登場させ、人生観を提示する契機とする。（注3）

次は、親族の弔問に訪れた詩である。

……

借問爲誰悲

……

借問す 誰が爲に悲しむと

懷人在九冥

懷ふ人は九冥にあり

禮服名群從

禮服は群從と名づくるも

恩愛若同生

恩愛は同生のごとし

……

……

（悲從弟仲德一首）

約言すれば「いとこが死んで悲しい」ということを、「借問」の形式に載せて「誰が爲に悲しむ」と問いかけ、「懷ふ人は九冥に在り」と自答した後、自分にとって大切な人の死と、その人物との関係や人となり、遺族の悲しみを諄々と語る。「借問」は大切な人の死を語る契機となる言葉である。

陶潜の「借問」は詩の前半に置かれ、「借問す」と問い、それに対する応答が続き、次の展開や本題に導くはたらきをする。

奈良時代、平安前期の文人たちは、陶潜の個人集よりも『文選』や『玉台新詠』の詩に親しんだ。これら二書にある曹植の詩「七哀」の「借問」を次に見ておきたい。

明月照高樓

明月 高樓を照らし

流光正徘徊

流光 正に徘徊す

上有愁思婦

上に愁思の婦有り

悲歎有餘哀

悲歎して餘哀有り

借問歎者誰

借に問ふ 歎ずる者は誰ぞと

言是客子妻

言ふ 是れ客子の妻

君行踰十年

君 行きて十年を踰え

孤妾常獨棲

……

孤妾 常に獨り棲む

……

（『文選』卷二三哀傷、『玉台新詠』卷二「雜詩五首（其二）」）

冒頭に、明月に照らされた高樓で月も落ちようとする頃、もの思いに沈む婦人がたえずむ姿を描き出す。「借に問ふ 歎ずる者は誰ぞ」と問いかけ、「遠くへ旅立った者の妻」と答えた後、夫に語りかけるスタイルで、「あなたが旅立ってもう十年を過ぎ、あれから私はずっと独り暮らし、……」と、再会がいつになるかわからない悲しみを述べる。続いて風になつてはるか遠くにいる夫の懷に吹き入りたいと願うが、心変わりがあつて受け入れられないかもしれないと不安を述べて詩は終わる。「借問」は、婦人の素性を紹介し、その内心を吐露する契機の語である。

陶潜も曹植も本題に入る契機として「借問」を用いる。確かに軽いニュアンスの語であるが、必ずしも「氣取った表現形式」とは言えず、そのニュアンスは前後の文脈によって変化する。「氣取った」とは、「借問」という詩句を「いざ言問はむ」と翻案した作者業平の意識を評したものであろう。

「七哀」は漢末の動乱に際し、夫と別離し独居を余儀なくされた婦人に代わつて、空閨を守る哀しみを述べた詩である。業平歌の場合、都から遠く離れた隅田川のほとりで、都に残した「わが思ふ人」の安否や消息を知る手立てがない悲嘆を歌う。遠く離れた人々を思う主体の性別と、その人物のいる場所が、故郷か異郷かの違いはあるが、ともに主題は時空を隔て、相手の自分を思う心が変わらずにある。あつてほしいことを切に願う「夫恋い」（妻恋い）の心である。「七

哀」詩も当該歌も季節は秋。平安前期には漢詩の「閨怨」や「悲秋」の概念が伝わり、漢詩だけでなく和歌にも詠まれ始めていた。広い意味でのシチュエーションが両者に共通している。

わが国で『文選』や『玉台新詠』に続いて愛読されたのは『白氏文集』である。『白氏文集』が日本に伝来し広まりつつあった承和年間（八三四～八四八）は、業平の少年期・青年期に当たると。そこで白居易詩の「借問」を確認しておきたい。

白居易は二十一首の詩に二十二の「借問」という表現を用いた。以下に引用する二首は「借問」＋「問いかける対象」＋「問いかける内容」で構成される。

日暮天地涼 日暮れて天地涼やかに

雨霽山河清 雨霽れて山河清し

長風從西來 長風 西より來り

草木凝秋聲 草木 秋聲を凝らす

已感歲倏忽 已に歳の倏忽なるに感じ

復傷物凋零 復た物の凋零するを痛む

孰能不慍悵 孰か能く慍悵せざらん

天時牽人情 天時 人情を牽く

借問空門子 借問す 空門子

何法易修行 何の法か 修行し易く

使我忘得心 我をして心を忘れ得しめ

不教煩惱生 煩惱をして生ぜしめざる

〔客路感秋、寄明準上人〕卷九・四二九

雨後の日暮れ、秋風が草木を揺らし、歳月が流れ、万物が凋落に

向かうのを見て心が痛む。「和尚さんにちよつとおたずねしたいが、修行しやすく、このような煩惱を生ぜさせないような方法はないものか」と。詩は上人への問いかけで結ばれる。「空門子」とは仏僧、ここでは明準上人を指す。旅の途上で秋の哀愁を感じ、上人に贈った書簡代わりの詩であるから、当然応答の部分はない。

次は人ならぬ長江や洞庭湖の水、大海原の水に問うた詩である。

借問江湖與海水 借問す 江湖と海水と

何似君情與妾心 君が情と妾が心と何似と

相恨不如潮有信 相恨む 潮の信有るに如かざるを

相思始覺海非深 相思ふ 始めて覺る 海も深きに非ざるを

〔浪陶沙詞六首（其四）〕卷六四・三二四九

「あの人の情と私の心とをあなた方と比べたらどうか」と人ならぬ江湖や海に問いかけ、「あの人が信ある潮にも劣り、私の思いが海よりも深いと悟つてつらい」と自答する形式である。

さらに、問いかける対象が明示されておらず、詩の最終句を「借問＋問いかける内容」のみで終わる詩もある。

小舫一艘新造畢 小舫一艘新たに造り畢り

輕装梁柱庫安篷 輕く梁柱を装し 庫く篷を安んず

…… 慢く牽き桜桃を傍らにして泊らんと欲す

借問誰家花最紅 借問す 誰が家の花最も紅なるかと

〔小舫〕卷五四・二四五八

小さな画舫舟が新たに完成し、水路の奥深くまで廻って春を満喫する様子を歌う詩である。桜桃の花の辺りで船を停泊させようとし

て「どの家の桜桃花が最も赤く咲いているのか」と問いかけ、詩はそのまま終わる。問いかける対象も明示されない。

陶潜と白居易の「借問」の用例と業平歌の「いざ言問はむ」とを比較すると、「借問+問いかける対象+問いかける内容」という明確な構造は陶潜の詩に近い。しかし、問いかける対象を「江湖」「海水」といった人ならぬものへ広げ、多様な問いかけ方をし、時には問いかけたまま詩を終える点は白居易詩に近い。なお「問いかける内容」そのものを一首の核心とする詠じ方は、陶潜にも白居易の詩にも見えず、業平が創出したといつてよいだろう。

三 「借問」と「言問ふ」との差異

業平が漢詩の表現を自分の和歌に取り込む場合、訓読的に日本語に置き換えることはせず、多くの場合『万葉集』の和歌に用いられる語彙・表現などを用いて大胆に翻案するという特徴があった。^(注4) 前節で見たように、詩語の「借問」は、「試みにたずねる」の意で、「ちょっとお尋ねするが」などと訳され、仮構の対象に軽い調子で問いかけ、多くは自ら答える形で本題に入っていく場合に使われた。業平歌の第二句の「いざ言問はむ」は、音数を七音にする必要もあつたろうが、「言問はむ」に「いざ」という感動詞が冠され、漢詩の「借問」にはなかった、相手に強く迫る調子がある。

業平が「借問」を翻案するにあたって『万葉集』の「言問ふ」を用いたとみて、両者のニュアンスの違いを確認しておきたい。

遠妻の ^{とほづま}ここにしあらねば… 思ふそら 安けなくに…み空ゆく 雲にもがも…明日行きて 妹に言問ひ〔於妹言問〕…今も

みるごと たぐひてもがも (巻四 相問・五三四・安貴王)
我が背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けし言問はずとも〔言不問友〕 (巻四 相問・六三七)

国遠き道の長手をおほほしく今日や過ぎなむ言問ひもなく〔己等騰比母奈久〕 (巻五 雑歌・八八四・麻田陽春)

あぢさはふ目は飽かざらね携はり言問はなくも〔不問事毛〕苦
しかりけり (巻二・古今相問往来歌・二九三四)
…行き集ひ かがふ嬢歌会に 人妻に 我も交はらむ 我が妻
に 人も言問へ〔他毛言問〕… (巻九・雑歌・一七五九)

『万葉集』では動詞「言問ふ」、名詞「言問ひ」が十八首に見え、その中の十首が相聞歌である。また多くは詠歌の時点で詠み手が「言問ふ」ことができない状況(死別・離別・臨終・羈旅など)にある。従って「言問はず」「言問はぬ(体言)」「言問ひもなし」「言問はじ」など大半が打消表現を伴い、さもなくば「妹に言問ひ…たぐひてもがも」「言問はましを」など、未来に「言問ひ」の実現を願う表現を取る。さらに「筑波山の嬢歌会」歌のように「求婚する」意に用いる場合もある。こうして見ると万葉歌における「言問ふ」は、相手に向かって直接にものを言う、真情を語ることを意味する語と言えよう。

陶潜や白居易の詩における「借問」が、「かりに問ふ」「こころみに問ふ」と訓まれ軽いニュアンスであつたのに対して、「言問ふ」は、それよりは改まって相手に直接に誠意をこめて語りかけるニュアンスであつたと考えられる。業平歌では、このような詩語「借問」と万葉歌の「事問ふ」との微妙な違いは意識したうえで、「都鳥」を

人格化し、「いざ言問はむ」と一見ユーモラスに呼びかけた。そして下の句の「わが思ふ人はありやなしやと」という深刻な問いの内容が明らかになった時、大きな落差があるにも関わらず、その悲哀の情がその場に居合わせた人々と読者の共感を呼ぶのは「言問ふ」が本来持っていた相手に正対し大切なことを直接に語るニュアンスに負うところが大きいのではないか。

以上のことから、業平歌は「借問」＋「問いかける対象」＋「問いかける内容」という漢詩の構造に倣った、前置き「名にし負はば」〔万葉集〕由来の語「名に負ふ」の変形）＋「いざ言問はむ」（借問）の翻案に当たる『万葉集』の語）＋「都鳥」（問いかける対象）＋「詠者の思いの核心」（問いのまま放任）という緊密な構成を意識して創作された歌であると言えよう。

四 「所思」と楽府題「有所思」

第二節において取り上げた「七哀」詩だけでなく、長征、地方への任官、商用などで離れ離れになってしまった男女の思いを歌った漢詩は多く、離れた所にいる愛しく思う人、大切に思う人という「所思」という表現がしばしば登場する。複数の漢詩を受容して一首の和歌を作ることを行った業平は、一首の構造だけでなくテーマも漢詩に典拠を持って詠んだ可能性が高い。業平歌の下の句「わが思ふ人はありやなしやと」の「わが思ふ人」ないしは「わが思ふ人（は）あり」という表現は漢詩の「所思」や「有所思」に依拠するものではないかということについて考察したい。

まず、「所思」の古い例として「楚辞」「山鬼」（山の精霊・女性）

から見ていきたい。

……

若有人兮山之阿
被薜荔兮帶女蘿
既含睇兮又宜笑
子慕予兮善窈窕

……

被石蘭兮帶杜衡
折芳馨兮遺所思

……

山かげに住み、薜荔の衣を着て女蘿の帯を締め、流し目を送り笑顔の素敵な「山鬼」が、「所思」（愛する人）へ愛情のしるしに「芳馨」（よい香りの花）を贈ろうとして、その心情を独白体で語る。愛する異性に香り高い花や草を贈ることは愛情の証である。

『文選』の「古詩十九首」にも、旅にある男が遠く離れた故郷の女性に「芳草」を贈ろうとする詩があり、贈ろうとする相手を「所思」と表現する。

涉江采芙蓉

江を涉りて芙蓉を采る

蘭澤多芳草

蘭澤には芳草多し

采之欲遺誰

之を采りて誰にか遺らんと欲する

所思在遠道

思ふ所は遠道に在り

還顧望舊鄉

還り顧みて舊郷を望めば

長路漫浩浩

長き路は漫として浩浩たり

同心而離居

心を同じくして離れ居む

憂傷以終老 憂ひ傷んで以て老を終へんとす

『文選』雜詩 第二十九卷「古詩十九首（其六）」

水辺で採った美しい蓮、蘭などの香り草を誰かに贈ろうと思うが、懐かしい人は遠く離れた故郷にいる。故郷に思いを馳せるが道は遠く、慕い合いながら会えぬまま憂愁のうちに年老いてゆく、それが悲しい、という内容である。第三句の「采之欲遺誰」は、親愛なる人に芳草を贈って恩情を結ぶ漢代頃の風習に基づき、「所思」とは「妻または親友をいう」と語注にある。

さらに、「玉台新詠」には、次のように「有所思」、「我所思兮在」という題や詩句を持つ詩が数多く収録されている。

卷五 雜曲三首 其二 有所思（沈約）

卷六 鼓瑟曲 有所思（王僧孺）

卷六 鼓吹曲二首 其二 有所思（費昶）

卷七 有所思（梁武帝）

卷八 雜詩五首 其五 賦得遺所思（劉孝綽）

卷八 雜詩八首 其一 詠得有所思（庾肩吾）

卷九 四愁詩四首 其一 其二 其三 其四（張衡）

卷九 擬四愁詩四首并序（傅玄）

其一 我所思兮在瀛州

其二 我所思兮在珠崖

其三 我所思兮在崑山

其四 我所思兮在朔方

卷九 擬四愁詩（張載）

其一 我所思兮在南集

其二 我所思兮在朔涓

其三 我所思兮在隴原

其四 我所思兮在營州

卷十 有所思一首（虞炎）

これは、恋愛をテーマとする「有所思」という樂府題が古くから存在し、それに倣って多くの擬樂府がつくられたからである。
次に示すのは、後漢の時代に歌われたという「有所思」である。

有所思
思ふ所有り

乃在大海南

何用問遺君

雙珠瑇瑁簪

用玉紹繚す

聞君有他心

拉雜摧燒之

摧燒之

當風揚其灰

從今以往

勿復相思

相思與君絕

雞鳴狗吠

兄嫂當知之

〔妃呼豸〕

秋風肅肅晨風颼

乃在大海南

何を用て君に問遺らん

雙珠瑇瑁の簪

玉を用て之を紹繚す

聞くならく 君に他心有りと

拉雜に摧きて之を燒かん

摧きて之を燒かば

風に當たりて其の灰を揚ぐべし

今より以往は

復た相思ふこと勿からん

相思ひとつ君と絶るるとき

雞は鳴き狗は吠ゆ

兄嫂も當に之を知るべし

〔妃呼豸〕

秋風は肅々として晨風は颼し

東方須臾高知之 東方須臾にして高くならば之を知らん

〔有所思〕「古楽府」

思う人がいて、その人は大海の南にいと歌い起こし、その人に何を贈ろうか、貴重な贈り物をあれこれ考える。ところが、男にふた心があると聞き、贈り物を壊し、男への思いも断とうと決意する。しかし、初めて逢った頃を思い出し、夜明けを待ったらお日様がはっきりさせてくれると思い直す、という内容である。

この詩から、楽府題「有所思」のおよその形式は、冒頭を「有所思」で歌い起こし、続いてその人がどこにいるかを示し、その人から自らの思いを伝えるべく貴重な物をあれこれ列挙して贈ろうとするが、結局それらは贈られないまま、相手の心変わりを懸念しつつ、悲しみは晴れないまま詩は終わるという内容だったと推測される。

『玉台新詠』所収の「有所思」には短い詩も多く、前述の古楽府の部分的な変奏が多い。詩句に「所思」を用いないものもある。

西征登隴首 西征して隴首に登り

東望不見家 東望するも家を見ず

……

流淚對漢使 涙を流して漢使に對し
因書寄狹斜 書に因りて狹斜に寄す

（卷五「雜曲三首」其二「有所思」・沈約）

……

所思不可寄 思ふ所は寄すべからず

唯憐盈袖香 唯だ憐む 盈袖の香

（卷八「雜詩五首」其五「賦得遺所思」・劉高純）

一首目は、出征中の男が隴山から都の伎女に思いを寄せた詩である。最後の二句は『伊勢物語』第九段、宇津の山で出会った修行者に「京に、その人の御もとにとて、文かきてつく」を想起させる。

二首目は、別れた「蕩子」に春の芳しい花を贈ってやりたく思うが、今となつては袖の残り香をなつかしむばかりだという詩である。遠く離れて暮らす男女の間で、相手のことを思っても心が届かない不安や心を届ける術のない悲しみを、さまざまに変奏して歌ったのが楽府「有所思」である。

業平歌はこれらの楽府題「有所思」を訓読改変して「わが思ふ人はありやなしや」とし、都に残した妻や恋人の安否を気遣い恋慕う真情を吐露する歌にしたと考えられる。

五「四愁詩」における「我所思兮在」

さらに『文選』や『玉台新詠』所収の「四愁詩」や「擬四愁詩」にも、楽府「有所思」とよく似た詩句がある。「四愁詩」とは「愁い」について作られた詩の意で、張衡の詩の序に、「時に天下漸く變え、鬱々として志を得ず。：屈原に依り、美人を以て君子と為し、珍宝を以て仁義と為し水深雪雰を以て小人と為す。道術を以て相報いて時君に貽らんことを思ふ」とあり、政治が正しく行われないことの嘆きが作詩の動機である。

四愁詩四首

張衡

一思曰

一の思ひに曰く

我所思兮在太山 我が思ふ所は太山に在り
欲往從之梁父艱 往いて之に従はんと欲すれば 梁父艱し

側身東望涕霑翰

身を側めて東のかた望むれば涕翰を霑す

美人贈我金錯刀

美人 我に金錯刀を贈れり

何以報之英瓊瑤

何を以てか之に報いん 英瓊瑤

路遠莫致倚道遙

路遠くして致す莫く 倚りて道遙す

何爲懷憂心煩勞

何爲れぞ憂ひを懷きて心煩勞する

〔文選〕卷二九、『玉台新詠』卷九

前半の三句はよこしまな人に遮られ「我所思」（君主）に近づくことができないことを嘆き、後半の四句は、君主から黄金の太刀を贈られ報いたいのが、邪臣に隔てられ愁いを募らせる。同じ内容を四首重ねるのは『詩經』の形式であるが、内容は屈原の『楚辭』「離騷」などに倣ったものである。「我所思」のいる場所が「太山」（王者が祀りを行う泰山）、「桂林」（舜帝が遊行した地）、「漢陽」（周の西伯文王が治めた地方）、「雁門」（顓頊が帝位にあった地）と変化し、遮るものも変わるがそれらは邪臣の比喩である。形式は四首とも同じで、思慕する君主の側に寄せず思いが通じない嘆きを歌う。張衡の「四愁詩四首」に倣い、傅玄や張載も「擬四愁詩四首」を作った。傅玄の「擬四愁詩四首」は張衡より一首が長くなる。

其一 我所思瓊瀛州 我が思ふ所は瀛州に在り

我所思兮在瀛州

我が思ふ所は瀛州に在り

願爲雙鵲戲中流

願はくは雙鵲と爲りて中流に戯れん

牽牛織女期在秋

牽牛織女 期秋にあり

山高水深路無由

山高く水深くして路由る無し

慙余不遭嬰股憂

慙れむ 余が遭はず股憂に嬰るを

佳人貽我明月珠

佳人我に貽る 明月の珠

何以要之比目魚

何を以てか之を要せん 比目魚

海廣無舟悵勞劬

海廣く舟無く悵として勞劬す

寄言飛龍天馬駒

言を寄す飛龍天馬の駒

風起雲披飛龍逝

風起り雲披きて飛龍逝く

驚波滔天馬不僵

驚波天に滔りて馬僵はず

何爲多念心憂世

何爲れぞ念多く心世を憂ふる

〔玉台新詠〕卷九

傅玄の擬作も「我所思」のいる場所が「瀛州」・「珠崖」・「崑山」・「朔方」と東・南・西・北の地に変化し、「雙鵲」・「比翼」・「飛雁」となって君主の傍らにありたいと願うがかなわない。また贈り物を受けたことに報いたいという願いもかなわない。

業平歌の「都鳥」は、単なる囁目の景ではなく傅玄の四愁詩の鳥などに触発されて発想されたとも考えられる。

業平歌の「わが思ふ人はありや」という表現が、「有所思」ではなく「四愁詩」「擬四愁詩」の「我所思兮在」に依拠したとすれば、「隅田川のはとり」で「思ひわびて」いる詠者は「楚辭」の屈原像に限りなく近づく。すると下の句は、主君の不興を買って宮中から距離を置かざるをえない状況にあった詠者が、なおも主君である帝を心から思慕することを表明した歌となる。さらに踏み込んで「：はありやなしや」が「有所思」の存在の有無を問う表現だとみれば、理想的君主の存在を懷疑する意となり諷諭性が高くなる。

六 白居易の「所思」

漢代から六朝時代までの楽府「有所思」では、作者（主として男

性)が女性になり代わり異郷にある男性を思慕する情を述べる場合が多いのに対して、白居易は「敬慕する人」、「心に思慕する人」の意で男性から男性に対して「所思」という表現を使った。

自吟拙什

自ら拙什を吟じ

因有所懷

因りて懷ふ所有り

……

時時自吟詠

時時 自ら吟詠し

吟罷有所思

吟じ罷りて思ふ所有り

蘇州及彭澤

蘇州及び彭澤

與我不同時

我と時を同じうせず

此外復誰愛

此の外復た誰をか愛する

唯有元微之

唯だ元微之有るのみ

趁向江陵府

江陵府に趁はれて

三年作判事

三年 判事と作る

相去二千里

相去ること二千里

詩成遠不知

詩成れども遠くして知らず

(『白氏文集』第六・二五六)

詩ができあがり吟じ終わると、敬慕する先人陶潜や韋応物が心に浮かぶが、彼らは同時代の人ではない。彼ら以外に誰を愛するかといえ、ただ元微(字は微之)がいるばかり。彼は江陵府へ左遷され二千里も離れているので、詩が出来上がった後も遠すぎて知らないままだと嘆く。白居易の「所思」は、空間的に遠くにあつて会えない人のみならず、すでに他界した敬愛する先人をも含み、作品が完成すると時空を超えて彼らと対話をしようとした。

白居易は元和十年(八一五)、四四歳の年に江州司馬に左遷された。その四年後、刺史に任ぜられ長江の上流にある忠州に赴く。不意な任地においては「所思」が大きな心の拠りどころであった。

初至忠州登東樓

初めて忠州に至りて東樓に登り

寄萬州楊八使君

萬州の楊八使君に寄す

山東邑居窄

山東にて 邑居窄く

峽牽氣候偏

峽牽きて 氣候偏す

林巒少平地

林巒 平地少なく

霧雨多陰天

霧雨 陰天多し

……

憑軒望所思

軒に憑りて思ふ所を望めば

目斷心悵悵

目斷ちて心悵悵たり

背春有去雁

春に背きて去雁あり

上水無來船

水を上りて來船無し

……

(『白氏文集』卷一一・五二八)

着任早々に街の東の樓閣から眺望すると、溪谷沿いの町や村は狭く、霧や雨のために空は暗い。欄干に寄つて友のいる方角を眺めても、憂いは増すばかり。北国へ帰る雁は見えるが、長江を遡ってくる船の姿は見えず、隣の州に友人はいるが会える距離ではなく、その手立てもない。「所思」とは萬州刺史、楊帰厚を指す。

江州司馬の任期が明け帝都への帰還を期待していた白居易は、さらに上流の四川省の辺鄙な街に赴任し、鬱勃たる気持ちを持て余す。長江の河岸の樓閣で鳥を眺め、長安や友人を思う。これは業平歌の詞書の状況と似るが、白詩は季節が春である。

立秋の日、洛陽から蘇州の劉禹錫に思いを馳せた詩もある。

立秋夕有懷夢得

立秋の夕べ夢得を懷ふ有り

露簾荻竹青

露簾は荻竹青く

風扇蒲葵輕

風扇は蒲葵輕し

一與故人別

一たび故人と別れ

再見新蟬鳴

再び新蟬の鳴くを見る

是夕涼颺起

是の夕べ涼颺起こり

閑境入幽情

閑境 幽情に入る

……

所思渺千里

思ふ所 渺として千里

雲水長洲城

雲水 長洲の城

〔白氏文集〕卷六・二九六五

立秋の夕べ、露が降りて簾の荻や竹は青々と涼しげに見え、別れて二度目の秋を迎えた。今宵、涼風が吹き閑静な境地にひたっている。鶴を眺め、笙の音を聞き、茶をすすり、詩を吟じ、雲水千里を隔てた長洲城にいる敬愛するあなたに思いを馳せる、という内容である。老境にさしかかってからの親友が劉禹錫（字は夢得）である。

白居易は貶謫されていた期間や、中央官僚の生活に見切りをつけ、外任を求めて杭州や蘇州の刺史として赴任していた期間に、政治的に志を同じくした友人たちと盛んに詩や書簡を応酬した。この詩を創作した時期には洛陽にいたが、七年前まで蘇州刺史であった。季節は折しも秋、渺々と果てしなく広がる江湖のほとりで、かつての自分のように郷愁にとらわれているであろう親友に思いを馳せる。

これらの詩から、白居易は敬愛する先人、心の通じ合える同時代

の友を「所思」と表現し、不遇な時代に彼らの存在を心のよりどころとしたことがうかがえる。詩に詠まれた「所思」のほとんど陶潜、韋応物、元稹、劉禹錫が長江の河畔の街に隠棲、赴任したり、貶謫された。中唐の名だたる詩人たちは、自己の信念を貫こうとしてしばしば対抗勢力に追いやられ、南方（長江沿岸の諸州やそれより南方）へ貶謫された。彼らは詩作そのものを心の拠り所とし、それらを贈って慰め合い数々の名作が生まれた。

白詩と業平歌における共通点は、詠者または「所思」のどちらかが江湖のほとりにいて、遠く離れた「所思」を深く思慕し、落刺感や寂寥感・漂泊感にとらわれている点である。

七 「先蹤のある表現」へのこだわり

以上のように「名にし負はば」歌は一首の構成を漢詩に倣い、初句から第五句までのすべてを『万葉集』や『楚辞』、『文選』、『玉台新詠』、『白氏文集』などの表現や詩句などをふまえつつ、それらを変奏し翻案して詠まれた。とりわけ下の句「わが思ふ人はありやなしやと」の典拠である「有所思」の典故をどう見るかによって、一首のテーマが、都に残した妻や恋人への思慕の情とも、主君から退けられてもお思慕し続け漂泊する悲哀とも、解することができる。むしろ、そのように多様な解釈ができるように業平は和歌をあえて創作したと言えよう。このような過剰なまでの先蹤表現の摂取は小西甚一氏の言う「倚傍」に他ならない。

嵯峨天皇から文徳天皇に至る約五十年間の唐風全盛期を経て、清和天皇の時代となって和歌が復興した時、和歌はすでに古今集的表

現に変わっていた。その変化については、六朝の詩文の影響が大であり、古今集の表現の特徴は「倚傍」に尽きると小西甚一氏は次のように述べた。^(注10)

古今集の表現に含まれる六朝的特性は、さまざまな点に認められるとしても、それらを約言すれば、畢竟「倚傍」に他ならぬ。

境界とまっすぐに真実感合せず、他の何ものかに寄り添う態度である。「他の何ものか」は、智巧的な見立とか、先行的表現への依存とか、語戯的なあそびとか、幾らも形をかえて存在する。しかし、それらを貫くものは唯ひとつ、境界の真実に直進せぬ曲線の性格である。古今集の表現に対する六朝詩（特に第四期）の影響を主張したい。

「倚傍」とは唐代の詩論の語で、把握した境界を客体化し外から眺め直した表現であり、把握即表現の直截性がない。万葉風から古今風に転じるに当たっては、単なる詩句の受容や摂取に終わらず、発想なども含めて漢詩からの推進が大きくはたらいっているという。

表現についていえば、先人によって発見された言い方を尊重し、それを踏襲していくところに表現美を感じる心理である。すなわち「先蹤の有る表現こそ美しい表現だ」という考え方である（吉川幸次郎博士「支那人の古典とその生活」）。「何かに倚りかかる」表現（換言すれば「倚傍」）はここに胚胎している。

業平は淳和天皇の天長二年（八二五）に生を受け、まさに唐風全盛期の中で成長した。「名にし負はば」歌が一首の構成を陶潜や白居易の詩に学び、楽府詩や四愁詩の詩句を一捻りして「わが思ふひとはありやなしや」と「都鳥」に呼びかけたとしても不思議では

ない。鳥が「都」という名を持つが故に発せられたこの問いは答えを期待しない問いで、語義的な遊びの域を超えた哀切な情感の表出である。楽府「有所思」や四愁詩「我所思兮在」や白詩の「所思」の由来であるとの詩を想起する読者は、別離の悲哀や漂泊の旅にある寂寥感を、依拠した漢詩も重ね合わせて一段と深く感じたはずである。この一首には見立てこそないが、ほぼ全句が漢詩や『万葉集』の先蹤表現を持ち、いわゆる「倚傍」の典型とも言うべき歌である。

業平歌の先蹤のある表現を多く取り込む詠歌法は後の時代という「本歌取り」に当たる。井上博嗣氏は本歌取りをした歌と本歌との関係を、次のように説明する。

本歌に対し本歌取りをした歌は、従属するのではなく、相乗作用を持つ関係にあらねばならなかった。（中略）本歌を下に敷き、その世界を含み込みながらも、反作用的にそれとは世界を違えて、本歌とどれだけ距離を保ち、かつ、それを測るかによって自らの歌の自立を勝ち取る方途、それが本歌取りなのである。

（本歌取り―和歌引用論^(注11)）

「本歌取り」という名称で「修辭」として明確に意識されるのは新古今集時代になってからであるが、平安時代前期に業平は貪欲に漢詩文を摂取し、前代からの和歌表現を土台にして、自らの歌の獨創性を追求した。業平が徹底して「先蹤の有る表現」に寄りつつ自立した和歌の創作を目指したのは、「和歌と漢詩の同価値性、同質性を強調し、和歌が正式の文学の座を獲得する」ためであった。^(注12) さらに彼の二五歳から三八歳までの十三年間の官位停滞期に、とりわ

けそれに没頭したとすれば、そこに自己の存在意義を見出そうとしたからではないか。

おわりに

最後に、業平歌の詞書と和歌との関係について述べておきたい。和歌の場合は、音韻数が三十一音であるという大きな制約があり、業平のように「仮構の世界の中に入って、その世界の作中人物の立場に立って詠歌」し、なおかつ「先蹤のある表現」を数多く取り入れようとする歌人にとって、「長文の題＋漢詩」や「詩序＋漢詩」の形式は絶好のモデルであった。

「詩序＋漢詩」の形式は陶潜のころから始まったといわれるが、白居易詩には「秦中吟十首 并序」(巻一・七五～八四)、「琵琶引 并序」(巻一・六〇二～六〇三)をはじめこの形式が多い。

業平はこれらに倣って状況説明的な部分は詞書に任せ、和歌では作中人物の真情を吐露することに徹した。その結果、「詞書＋和歌」を一つの作品と見た時の完成度は高くなったが、和歌だけを取り出して鑑賞した場合、「仮名序」の業平評がその典型だが「心余りて、言葉足らず」と評されることとなった。

『古今集』の撰者が他の和歌と形式をそろえて詞書を整理しようとしたとき、地名なり、一行の心境なり、都鳥の外観、名をめぐる渡守との応酬などを削ったり要約することは、一首を損なうことであった。業平歌の魅力を減じないように、撰者が苦勞して編集した究極の姿が、現在の『古今集』羈旅の部の詞書ではないだろうか。

注

- (1) 神田龍之介「東下り章段の成立と虚実」(『伊勢物語 虚構の成立(伊勢物語 成立と享受①)』山本登郎編、二〇〇八・一二、竹林舎)による。
- (2) 「日本詩人選6 在原業平・小野小町」(一九七二・一〇、筑摩書房)八九頁による。
- (3) 「陶淵明」(新釈漢文大系 詩人編I)の「借問」の語注(一〇二頁)による。
- (4) 拙稿「在原行平・在原業平における白居易詩の受容」『古今集』布引の滝の歌をめぐる一「(言語表現研究」第十九号、二〇〇三・三)、「在原業平における白居易詩の受容」『古今集』における「雨中の藤花」の詠」(『言語表現研究』第三十二号、二〇一六・三)などによる。
- (5) 「所思」には、「おもふこと」「おもひ」の意と、思慕する人の意がある。「所欽」「所飲」「所怙」「所後」などの熟語もあり、「所思」は古くは「おもふひと」と訓じていたと考えられる。
- (6) 花房英樹『文選(詩騷編) 四 全釈漢文大系29』(一九七四・一二、集英社)「所思」の語注(二三五頁)による。
- (7) 小尾郊一・岡村貞雄氏による「楽府」の解説を要約引用する。
楽府とは、もとは漢の武帝の時代に設けられた音楽の役所(楽府)をいい、そこで採用した民間の歌謡や新しく作った歌(がふ)を(楽府)と呼んだ。楽府は最初の作者によって、詩の主題と楽曲が決められ、後の人々は最初の楽府題のテーマとふしを踏襲しな

が多くの擬作（擬楽府）をつくった。後世これが歌われなくなると、楽府題は楽曲でなく、詩の内容を規定するようになり、うたう詩からよむ詩へと変わっていき、テーマは同じであつても、表現の仕方を種々に工夫することになり、「作詩における練習課題」としての性格を持つようになった。

〔古楽府〕一九八〇・二、東海大学出版会

- (8) 渡辺秀夫氏は『伊勢物語』における漢詩文受容』において、第九段「都鳥」の箇所に関して『楚辭』「九歌・抽思」の「倡（うた）曰く、鳥有り南ヨリス。来タリテ漢北ニ集マル。好娉佳麗ニシテ、畔レテ独リ此ノ異域ニ処ル：流水ニ臨ミテ大息ス」が下敷にされた可能性を指摘する（『平安朝文学と漢文世界』一九九一・一、勉誠社、五一―五二頁）。都鳥については諸説あるが『万葉集』に「舟競ふ堀江の川の水際に来あつつ鳴くは都鳥かも（美夜故杼里香蒙）」（巻二〇・四四六二）とあり、『忠岑集』に「：はるたたば またあふさかを こえかへり わがみにちかく みやこどり とひくることは：」（八七）と詠まれ、難波や京都周辺に「都鳥」が棲息していたらしい。業平歌の詞書の「京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず」は、隅田川の渡守に鳥の名を尋ねるための仮構であろう。

- (9) 新日本古典文学大系『古今和歌集』四一 一番歌の語注では、「ありやなしや」は「白楽天の詩などに多い、主に結句に使う「問：有無」「有」「在不」の語法を学んだもの」とする。漢詩では「：かどうか」という軽い疑問の意である。

- (10) 小西甚一「古今集の表現の成立」（初出は『日本学士院紀要』

七卷三号、一九四二・二。日本文学研究叢書『古今和歌集』、一九七六・一、有精堂）による。

- (11) 小倉百人一首の言語空間―和歌表現史論の構想―』糸井通浩・吉田究編、一九八九・一一、世界思想社

- (12) 安藤テルヨ「古今集歌風の成立に及ぼせる漢詩文の影響について」（初出は、東京女子大学『日本文学』第六号、一九五六・三。日本文学研究叢書『古今和歌集』、一九七六・一、有精堂）による。

- (13) 片桐洋一「漢詩の世界と和歌の世界」（『古今和歌集の研究』一九九一・一一、明治書院）による。

（くは みずよ・西宮市立西宮高等学校）

